

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2025

私たちが見た日本語教育の現場と魅力 ～東洋国際文化アカデミー～

2025年8月24日～25日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生8名が仙台に集まり、合宿を行いました。合宿では、仙台市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色



[法務省告示校](#) [学校法人](#) [曳地学園](#) [東洋国際文化アカデミー](#)

東洋国際文化アカデミーは2011年に開校した、仙台市内の日本語学校の中では比較的新しい日本語学校です。2025年8月時点での学生数は395人で、10月に10人の学生が入学する予定だそうです。在籍している学生は、ネパール、スリランカ、バングラデシュの方が多く、高校卒業後すぐに来日した若い方や大学院を卒業した後、社会人になってから来日した方など幅広い年代がいます。その他に中国、カナダ、アメリカの学生が1名ずついたり、国籍や文化、年齢を越えて様々な学生が在籍しているそうです。

学生の卒業後の進路としては90%が専門学校で、その多くが自動車系、ビジネス系の専門学校に進学するそうです。日本で働き、日本で生活していきたいと考える学生のニーズに答えるため、日本語の習得だけでなく、日本で生活するためのルールやマナーの教育にも力を入れている学校です。

授業見学



今回見学したのは中上級レベルのクラスで、教材には『TRY！日本語能力試験 N3 文法から伸ばす日本語』（アスク出版、2014年）が使用されていました。授業はすべて日本語で進められ、先生からは教材のページ指定や取り組む課題の説明が繰り返し丁寧に行われていました。授業の進行は比較的速く、学生たちはしっかりと耳を傾けながら内容を理解しようとする姿勢が見られ、高い集中力と日本語能力がうかがえました。

教室内は明るく落ち着いた雰囲気で、特徴的だったのは、学生が問題に取り組んでいる間にも先生が一人ひとりに声をかけ、学習内容への理解を促すと同時に、コミュニケーションを通じて学生が集中

して、主体的に授業に参加できるようサポートしていた点です。授業では、文法や語彙の解説に加えて、学生自身にその語の意味を他の言葉で言い換えさせる活動が取り入れられていました。このような指導法は、受け身にならずに「日本語を使う力」を養ううえで効果的であり、語彙の意味理解と定着につながっていると感じました。

さらに、授業中には学生が自由に発言しやすい雰囲気があり、答え合わせの場面では、間違っている学生に対して別の学生が自然にフォローする様子も見られました。教室内には互いに助け合おうとする姿勢があり、温かく協力的な学習環境が形成されていました。

先生は常に笑顔で学生に接しており、親しみやすい雰囲気を保ちながらも、遅刻などの日本で重視されるマナーに関してはしっかりと注意していました。その姿勢には、信頼関係を築きながらも学習の場としての規律を保つ、メリハリのある指導方針が感じられました。

学生と先生の距離が近く、また学生同士のつながりも強く感じられ、より実践的で相互理解の深い学びの場であるように感じました。全体を通して、学生一人ひとりの学びを尊重し、参加を促す工夫が多く見られた貴重な体験でした。

講師インタビュー

「“生きていく”ための日本語教育」

「全くわからない状態から日本語を学び始める学生が多いので、理解できているかを確認することが大切です」と語るのは、現在、日本語教師として主に初級の授業を担当する先生です。授業では、日本で生きていくことを意識して、生活に直結した「コミュニケーション力の向上」を目指しているそうです。例えば、タクシーに乗る場面では、行き先の伝え方や支払い方法の練習を通じて、実生活に役立つ力を養っているとお聞きました。また、商店街のお祭りでお神輿を担いだり、サクランボ狩りに行くなど、イベントへの参加や開催にも力を入れているといいます。こうした活動は、日本語を使うだけでなく、文化やマナーを学ぶ場にもなっており、地域の人々とのつながりをつくる貴重な機会となっているとのことでした。

「今でも授業をすることに不安があります。だからこそ、勉強し続けることが大切だと思います。」と語る先生の姿が印象的でした。不安と向き合いながら教え続ける姿勢に尊敬の念を抱くと同時に、不安があるからこそ自己成長ができるのだと思いました。インタビューを通して、学生のことを常に考え、学習だけでなく生活面でも支えている姿勢が強く伝わってきました。毎日いろいろなことが起こる現場で、学生とともに成長していく先生の姿に、日本語教育の奥深さと面白さを感じました。

「〇をつけるにも覚悟がいる」

「日本語教師は俳優のようなもの」と語るのは、現在、日本語教師として上級クラスを担当する先生です。教室では、表情や身振り、絵を使いながら「ことば」を伝える毎日。時には演じ、時には心を鬼にしながら、学生と真剣に向き合っているらしいです。教室の雰囲気もどこか家族のようで、先生が親で、学生が兄弟姉妹のような関係に感じられました。そこには、日本語を学ぶだけでなく、マナーやルール、生き方まで伝えようとする、あたたかさや覚悟がありました。

とくに心に残ったのは、「〇をつけるにも覚悟がいる」という言葉です。評価はただの作業ではなく、相手の成長を想像しながら行うという考えに共感しました。学生の突拍子もない言動に内心おもしろさを感じつつも、きちんと注意するその姿には、教育者としてのプロ意識が感じられました。また、年上の学生に対してもごまかさず、誠実に対応してきたという先生のお話からは、信頼関係が積み重ねの中で築かれていることがよくわかりました。

訪問の感想

今回の合宿では多くのことを得られました。授業見学させていただいた際、できないところは何回も言ったり、時には例を出してわかるまで寄り添うのに対し、授業に遅れた学生にはビシッと注意していたのが印象的でした。インタビューさせていただいた先生もマナー面というところを重要視されており、「人として」という部分は日本語教員を目指す上でことばを教えるよりも強く意識するポイントなのだと感じました。また、生徒との信頼関係を築き、明るく居心地の良い教室を作られていて、その他にも参考になったことがたくさんあって貴重な時間でした。 Y.S. (北海道文教大学)

日本語学校を見学した際、特に興味深かったのは、教室の掲示物です。漢字が苦手な学生が多いようで、「今週の漢字」として学んだ漢字が掲示されており、学習をサポートする工夫が感じられました。また、110番が警察で119番が消防・救急であることを示した掲示物や、自転車の乗り方、ごみの分別など、生活に役立つ情報が多く貼られており、見ていて面白かったです。日本語を教えるだけでなく、日本の文化やマナー、ルールを伝えることも日本語教師や日本語学校の重要な役割であると感じました。

M.Y. (北海道教育大学函館校)

私はこの合宿を通して、日本語学校によって特色があり、学生の国籍や学習目的が異なることを学びました。例えば、私が住んでいる地域の近くでは中国や韓国、台湾など東アジアの方が多いですが、東洋国際文化アカデミーには南アジアの学生が多いという違いがありました。私は今回、初めての日本語学校訪問でしたが、想像よりはるかに学生が楽しそうに日本語を学んでいる様子を見て、実際に行ってみたり、在校生や先生方と交流したりすることでしか得ることのできない学びがあるということを改めて実感しました。

M.S. (札幌国際大学)

今回の合宿で初めて日本語学校を訪問し、身近なところにも文化の違いがあることを実感することができました。授業見学中、多くの学生が黒鉛筆を使っていたのが印象的で、先生に理由を伺うと、出身国では文房具にお金をかける習慣や鉛筆を使う文化があまりないとのことでした。日本では試験等で鉛筆の使用が求められるため、学校で指導しているそうですが、赤青鉛筆などを持つ学生は少ないそうです。こうした文房具にも文化的な違いが表れることに驚きました。また、授業の雰囲気や先生と学生の関わり方も新鮮で、貴重な学びとなりました。

S.M. (東北学院大学)